

日本人大学生英語学習者のアルバイトにおける英語使用とアイデンティティ構築 ーナラティブ分析の視点からー

山本由実(同志社女子大学)

1. はじめに

本研究は、日本人大学生英語学習者がアルバイト先での英語使用について語るインタビュー・ナラティブを分析し、その英語使用が彼らにどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることを目的とする。一般的に日本人が英語に触れたり使用したりする割合はごく小さく（寺沢，2015；GMO リサーチ，2017），英語を用いて外国人と交流する機会は殆どないと考えられる。しかし例外として，観光地や大学近隣など外国人が局所的に多い地域にある店や施設などにおいては，必然的に外国人との接触頻度が高くなる。このような場所でリング・フランカとしての英語を使用し，アルバイトとして働く日本人大学生英語学習者を本研究の研究対象とする。

2. 研究の背景とリサーチクエスチョン

アルバイト先では学生という立場とは異なる，施設や店のスタッフとしての役割（Goffman, 1959）をもって業務に当たることになる。そのため，同じ英語という言葉を使う場面であっても，業務中は大学の授業や友人と交流する場合とは異なる自己が表出されることが推測される。また，アルバイトでの英語使用の機会は教室場面では得ることが難しい外国人とのオーセンティックな（Crystal & Davy, 1975; Gilmore, 2007）交流が見込まれる。そのような体験は学習者にとって学習の動機づけや将来のキャリア構想に重要な要素になると考えられるため，十分検証する価値があると思われる。しかしながら，こうした大学生英語学習者の情意面に影響をもたらすであろうアルバイトでの英語使用については，Cuomo（2020）などの限られた研究しかなく，さらに，ナラティブ研究の視座から英語使用者のアイデンティティ構築に踏み込んだ議論をしているものは管見の限りない。

こうした状況をふまえて，本研究は 1) 日本人英語学習者はアルバイト先での英語使用をどのように捉えているのか，2) 日本人英語学習者は研究者とのインタビューの場でアルバイトでの英語使用について語る際にどのようなアイデンティティを構築しているのか，という二つの問いについて考察する。

3. データの情報と分析の枠組み

3.1 データの情報

本研究では，2021 年度より継続して収集している日本人大学生英語学習者への英語学習・英語使用にまつわる語りのうち，アルバイト先での英語使用について語られた 3 名（H, S, D）と調査者 I の個別オンラインインタビュー・データを用いる。調査者はインタビュー当時 40 代前半の語学講師であった。研究協力者の情報は表 1 を参照されたい。

表 1: 研究協力者の情報

	仮名と性別	学年	I の英語授業の受講経験	アルバイト先	インタビューの回数・実施日
データ 1	H 男性	大学 3 年	あり	スーパーマーケット	2 回目のインタビュー・2024. 3. 21
データ 2	S 女性	大学 1 年	あり	カフェ	1 回目のインタビュー・2023. 3. 9
データ 3	D 男性	大学 2 年	なし	公共施設	2 回目のインタビュー・2023. 3. 4

3.2 分析の枠組み

分析にあたっては Bamberg（1997, 2004）のポジショニング理論を援用する。Bamberg の 3 つのレベル分けに従い，レベル 1 の研究協力者が語る物語世界での自己や他者の位置付け，レベル 2 の「今・ここ」の相互行為の場での自己の位置付けを検証し，それらをふまえて，レベル 3 のインタビューの場を離れても保持される社会文化的アイデンティティを探る。

4. データ分析

4.1 大学生だからって呼ばれる

データ①は、アルバイト先のスーパーマーケットでの英語使用の経験について語った研究協力者 H に対して調査者 I が、外国人客が来たら H が呼ばれて担当するのが尋ねており、その答えが 01 行目から始まる。内容としては、店内での外国人客対応において他の店員がどうしようもできない場合に H が呼ばれ、対応するという話である。「一応大学生だからっていうところで」(07 行目)そのような状況に対応できる語学力があるだろうと駆り出され、他の店員には主婦が多いため、「かっこ悪いとこ見せるわけにいかない」(10, 12 行目)と H も快く応じる。しかし、H 自身も相手の言っていることがきちんと理解できるわけではないため、内心はパニックに陥りながら対応しているという話が演技を交えながら(23-24 行目)面白おかしく伝えられる。

ここでの H の語りを Bamberg (1997, 2004) のポジショニングに当てはめてみると、レベル 1 の物語世界では、スーパーマーケットという職場において「大学生」としての自分とその他の店員(主婦が多い)を対置して登場させている。「頼もしいね」(21 行目)と言われる自分は、英語を現役で学んでいる大学生として期待されている存在である。レベル 2 の「今-ここ」のインタビューの場では、自分の英語力を知る教員でもある

I に対する、職場での過大評価を留保するような態度が見られる。「ま結局僕もあんまよくわかんないですけど(.)」(09 行目)、「頼もしいねって言われてるんですけども」(21 行目)と「けど」節を挟みながら、自分の気持ちや状況を説明する。また、18-19 行目、22-24 行目では、類似引用の談話標識「みたいな」(メイナード, 2004)を用いながら、実際の状況を説明したり演じたりしている。インタビューの場を離れても保持されるアイデンティティを考察するレベル 3 では、外国人客を完全に理解できるほどではないながらも、自分の英語力を資源として、職場での頼りになる大学生としての「役割」を演じる者として自己のアイデンティティを構築していると言える。

データ①大学生だからって僕が呼ばれる

01. H: あ:えっと:(1.5)呼ばれ(.)たりとかないんですけども:
02. 外国人の人が他の店員に話しかけて
03. 他の店員がもうまじでわかんなく
04. 日本語あ:英語全然わかんなくて
05. で僕が呼ばれる(.)っていうのはあるんですよ=
06. I: =うんうんうんうんうん((頷きながら))
07. H: って一応大学生だからっていうところで(.)
08. I: ((数回頷く))
09. H: ま結局僕もあんまよくわかんないですけど(.)
10. [まあの(.)とりあえずなんか(.)かっこ悪いとこ見せる
11. I: ((笑顔))
12. H: わけにはいかないの=
13. =あの[主婦の方々がが多いので働いてる人
14. I: [((笑いながら数回頷く))
15. H: ああもう大丈夫です任せてくださいって
16. I: @@@
17. H: あの他のとこに行ってもらって
18. そっから(.)@¥頑張ってみたいな¥
19. ¥あ大丈夫大丈夫です任せてくださいみたいなの¥
20. I: @¥かっこいいか? [こいい¥
21. H: [頼もしいねって言われてるんですけども
22. 僕も頭の中パニックってるみたいなの
23. °なんて言ってたんだこれなんだなんだこれ速いみたいなの(1.0)
24. え何探してるばバケツバケツバケツってパンかなみたいなの
25. I: @@@@
26. H: みたいなのはよくあります

4.2 喋れない人もレジを担当する

データ②は、大学生になってから始めたアルバイトであるグローバルに展開するカフェ・チェーンでの業務における英語使用について語る箇所からの抜粋である。データ直前で S は、外国人客に英語が通じた時の嬉しさがモチベーションに繋がっていると語っており、アルバイト先での英語使用を好意的に受け止めている。本抜粋では、アルバイト先で誰が外国人客の対応をするのかということが話題にあがり、英語力の有無でなく、順番が当たった店員が担当するということが述べられた。

ここでデータ②での語りを、Bamberg (1997, 2004) の 3 つのレベルに分類する。レベル 1 の物語世界では、I の質問(01-02 行目)により S はアルバイト先での同僚を、「英語が話せる人・話せない人」と二分するが、後に、誰が担当するかという話になり、一度は二つに分けたものを区別のないひとまとまりとして表現し直す。S は英語力如何にかかわらず業務を担当し、「レジを絶対変わったりするとかはないって感じですよ」(11 行目)と店員一人一人が責任を持ち自分の仕事を完遂することを強調する。レベル 2 では、S の回答への I の想定はずれによって生じるやりとりが特徴的である。I の「喋れる人が担当になってたら(.)そのまま行くし:そうじゃなか

データ②喋れない人もレジを担当する

01. I: あ:そのバイト先では:割と英語喋れる感じですか
02. バイト仲間(.)とか
03. S: えっと:半分は喋れて半分は喋れないって感じです
04. I: う:んふんふんふんふん((軽く頷きながら))じゃあまその:
05. 喋れる人が:担当になってたら(.)まそのまま:行くし:
06. そうじゃなかったら変わちょっとヘルプしてみたいな感じ
07. になるんですか°ね°
08. S: いやえっと喋れなくても自分が担当する
09. 喋れない人も自分が担当して((両手を動かしながら))
10. I: ((頷く))
11. S: レジを絶対変わったりするとかはないって感じです
12. I: あ[:
13. S: [喋りざるを得ない[みたいな@
14. I: [@@@
15. そうなんや:えそれはもう決まったりとかするんですか
16. マニュアルとかで
17. S: あ(.)全然マニュアルとかはないんですけど
18. ほんまに(.)独自で:なんか(.)結構[やってねって感じで:
19. I: ふ:ん((頷きながら))
20. S: って感じです

¹ 三枝 (2007) によると、接続助詞「けど」類は主要な部分が後ろに続くという発話意図があるとし、話し手は断定を避け、聞き手に会話を続ける意思表示をしていると指摘している。

ったら変わちょっとヘルプしてみたいな感じになるんですかね」(05-07 行目)からは、十分な英語力がある店員が外国人の接客を行うべきという I の考え方が窺える。それに対して S は「いやえっと」(08 行目)と前置きしつつ、それを否定する。続く I の「あ:」(12 行目)と納得しているのかわからない発話に対して、S は「喋りざるを得ないみたいなの@」(13 行目)と説明を加え、さらに笑いを差し挟むことでコンフリクトを避けるストラテジー (Jones, 1990) が見られる。I もそれに笑いで応じる(14 行目)が、「えそれはもう決まっていたりとかするんですかマニュアルで」(15-16 行目)と尋ねており、英語を話せない人が英語で接客をするには「マニュアル」などの何らかの拘束力が必要だと考えていることが推測できる。これに対しても I の想定は裏切られる。これらレベル 1, 2 をふまえて浮かび上がる S のアイデンティティ(レベル 3)は、職場では英語力の有無にかかわらず自分に割り当てられた業務はやり遂げるということをごく当然のこととして受け入れ実践している者として自己のアイデンティティを構築していることがわかる。このことは、S と対照的に、できる仕事は英語力によって区分けしようとする I とのやり取りの中で、より鮮明に浮き彫りになった。

4.3 仕事として英語を使うってこういうこと

最後に取り上げるデータ③は、データ①、及び②とは異なり、自分が将来なりたい職業に繋がる職場でのアルバイト体験についての語りである。また、データ①、②の研究協力者たちが日常的にアルバイトのシフトに入っていたのに対し、データ③の研究協力者 D は、当初は月に 2 回、インタビュー時には滅多にシフトに入っていなかったという違いがある。

データ③仕事として英語を使うってこういうこと
 01. D: まあそこで英語とかで話しかけられる機会っていうのが
 02. やっぱちょくちょくあります:
 03. だからその学校以外でやっぱその実社会で(.)
 04. あの(.)喋りかけられるっていう経験を初めてして
 05. I: う:ん
 06. D: そこでやっぱちゃんと仕事として英語を使うって
 07. ということなんだろうなっていうのは(.)
 08. あの肌身を持って感じたというか
 09. I: “ふ:ん”
 10. D: でただやっぱそのちゃんと喋れない喋れたかって言うと
 11. 全然そんなことはなくて:なんか
 12. ちょっと伝えるのに必死だったりとか:
 13. ちょっとあの(.)英語の案内が書いてある文字を読んでもらったりとか:
 14. あとはジェスチャーとかでなんとかしのいでるっていう感じなんですけど:
 15. I: “ふ:ん”
 16. D: やっぱそこで必要なんだっていうのはすごい感じたというか
 17. I: ((数回頷く))
 18. D: だからちゃんとどんな仕事にするにあたって
 19. 英語ってやっぱちゃんと使えるようになっておく事って
 20. 絶対意味はあるよなっていうのはなんかすごいバイトをしてて思ったことで
 21. I: う:ん((頷きながら))
 22. D: なので、なんか将来像みたいな
 23. 多分昨年[(.)]なんか[(.)]あの案内とかで使うみたいと思うんですけど
 24. I: [(.)]((数回頷く))
 25. D: でもそれとほぼ同じようなことを今 1 年経ってやって
 26. I: ((数回頷く))
 27. D: より必要性を感じたというか
 28. I: う:ん((頷きながら))
 29. D: ちょっと(.)そこはまあステップアップしてるのかなとは思いますが
 30. その使用↑の将来像みたいなについては((数回頷く))

研究協力者 D は、初回インタビューで自分が就きたい職種について話しており、ちょうど一年ほど経って行われた 2 回目のインタビューにおいて、その「将来像に近い経験をできた」として語った箇所からの抜粋がデータ③である。D はアルバイト先で仕事として英語を使うという経験を通して、どんな職業についても英語をきちんと使えるようになっておくことは意味のあることだと気づくとともに、この体験が自らのキャリア・ビジョンを描く助けになり、自分が「ステップアップ」(29 行目)していると評価する。

Bamberg (1997, 2004) の 3 つのポジショニング・レベルを援用して D の語りを見てみると、01-20 行目で描かれる物語世界(レベル 1)で、D は自己を英語使用初心者として位置付け、職場での英語使用を体験し、困難を感じる経験を経て、英語を学ぶ意義を再確認したというストーリーを描いている。さらに、22-30 行目ではそれをふまえて、より俯瞰的な視点に

立ち、一年前の自分よりも成長した者として自己を位置付けていることがわかる。一年前のインタビューでは将来像として挙げていたこと(英語で外国人を「案内」(23 行目)すること)を実際に体験することができ、より英語の必要性を感じたと語っている。次に、レベル 2 にあたる「今-ここ」のインタビューの場での D の自己表出を見てみると、01-20 行目の職場での英語使用体験のエピソードとその評価の語りの中に散見される「やっぱ・やっぱ」が特徴的である。「やっぱ・やっぱ」は、主に前提となる命題と当該の命題を確認・再確認(森田, 1989)する機能があると見られるが、ここで確認・再確認されている事項に鑑みると、D が内面化している英語にまつわるマスターナラティブが前提となっていることが窺える。D は、もともと重要視していた英語がやはり必要なものであったという自分の考えを、聞き手に印象付けるような語り方をしていると言える。レベル 3 では、自分が求めていた仕事での英語使用という体験から英語の必要性を再確認し、その意識変革を通して成長する者として自己のアイデンティティを構築していることがわかった。

5. 考察とまとめ

本研究はアルバイト先での英語使用にまつわる 3 つのデータから 3 人の語りを分析した。ここで本研究の問いを再掲し、回答を示したい。まず、1) 日本人英語学習者はアルバイト先での英語使用をどのように捉えているのか、については、日本

人大学生英語学習者は、その頻度により異なる捉え方をしていることがわかった。例えば、データ①の研究協力者Hはアルバイト先で英語ができる「大学生」と見られ、外国人接客の際のトラブルシューターとして頼られているが、自身に十分な英語力がないとしながらも業務をこなし、受け持つべき仕事の一環として英語使用を捉えている。データ②の研究協力者Sも、英語力如何にかかわらず受け持った仕事(レジ)は最後までやり通すことを当然のこととして語っている。これら二つのデータから言えることは、日常的にアルバイトで英語使用をする者は、英語使用を業務の一環であり、やって当然のものと捉えているということである。言い換えれば、彼らは職場での「役割」(Goffman, 1959)を優先させ、英語力が十分か不十分かということは不問に付し、自分の英語力を資源として業務を行っているということだ。一方で、データ③の就職を志望する業種に関連するアルバイトをした研究協力者Dは、HやSほどシフトに入っていないため、アルバイトの経験を貴重な経験として捉え、自身の将来像をイメージできたと今後の英語使用へと期待をもたせるものとして捉えていた。

次に、2)日本人英語学習者は研究者とのインタビューの場でアルバイトでの英語使用について語る際にどのようなアイデンティティを構築しているのか、についてであるが、データ①、及び②の分析から、日常的にアルバイトに従事している研究協力者は、職場での英語使用を業務の一部として当然のこととして受け入れ対処し、その場での「役割」を帯びた者としてのアイデンティティを構築していることが共通して見られた。データ③はアルバイトとはいえ、数回のみ体験だったため、先の二つのデータとは異なる様相を見せた。貴重な機会として体験された職場での英語使用は意識変化を生むものとして捉えられ、その体験をもとに成長する者として自己のアイデンティティを表出していたと言える。

本研究は日本人大学生英語学習者のアルバイトでの英語使用について、インタビュー・ナラティブを分析し、役割を帯びた中での英語使用に関わるアイデンティティ構築を検証した。アルバイト先での英語使用は、自分自身の英語力への自負や周囲からの期待、英語にまつわるマスターナラティブ、労働環境や頻度などが、研究協力者にさまざまな影響を及ぼすことがわかった。また、研究協力者の語りからは学校等で意識するような試験の点数や発音、流暢さなどには主眼が置かれず、そこで従事するタスクが前景化されていることが明らかになった。応用言語学では英語学習者のモチベーションやWTC向上について議論されているが、本研究での「役割」を帯びた状況での英語使用についての研究結果は英語教育に関連する分野にも重要な示唆になると考える。より説得的な研究にするためさらなる事例研究を積み重ねていきたい。

参考文献

Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 335-342.

Bamberg, Michael (2004). Form and functions of ‘slut bashing’ in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.

Crystal, David, & Davy, Derek (1975). *Advanced conversational English*. London: Longman.

Cuomo, Osaze (2020). Survey of English language use in part time job of Kansai area university students. 大阪観光大学紀要, 20, 24-27.

Gilmore, Alex (2007). Authentic materials and authenticity in foreign language learning. *Language Teaching*, 40(2), 97-118.

GMO リサーチ (2017). 「英語に関する意識調査」を未成年・成人計 10,000 名に調査: 英語の活用意欲は成人より未成年が高い傾向に 2017 年 9 月 29 日 <<https://www.gmo.jp/news/article/5792/>> (2024 年 12 月 16 日)

Goffman, Erving. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Doubleday.

Jones, Kimberly, Ann (1990). *Conflict in Japanese conversation*. Ph.D. Dissertation. University of Michigan.

メイナード K 泉子 (2004). 談話言語学-日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究-. くろしお出版.

森田良行 (1989). 基礎日本語辞典. 角川書店.

三枝令子(2007). 話し言葉における「が」「けど」類の用法. 一橋大学留学生センター紀要, 10, 11-27.

寺沢拓敬 (2015). 「日本人と英語」の社会学-なぜ英語教育論は誤解だらけなのか-. 研究社.

トランスクリプト記号

(.)	1.0 秒以下の沈黙	(1.0)	数字の秒数の沈黙	:	長音
[	オーバーラップが始まるどころ	@	笑い	¥--¥	笑いながらの発話
(())	非言語行動の説明	=	続けて聞こえるところ	↑	その直後に上昇するところ
>--<	他と比べて早いところ	<-->	他と比べて遅いところ	()	聞き取れないところ